原　著

# 関東大震災と精神科都立松沢病院

金川　英雄
関東労災病院
昭和大学精神神経教室

（平成 28 年 5 月 12 日受付）

**要旨**：精神科病院は災害に弱く，たびたび火災，地震などにあった．現存する中で日本最古の公立精神科病院，都立松沢病院は 898 床，1919 年開院で関東大震災は松沢建設の 4 年後 1923 年に起こった．速やかに復旧したがこの経過を示す一次資料を基に，精神病院法と精神科病院の災害，復旧について論じた．太平洋戦争前，精神科病院は 2 つの法律で管理された．1924 年精神病院法第 3 条の規定で，関東大震災の松沢病院の復旧費の半分 20 万円が補助され他にも同様例がある．1888 年に軍隊に看病人という資格が置かれ，1890 年に日本赤十字社で看護婦養成開始，1896 年からは男子看護人養成も始まった．1895 年に日清戦争が終わったので，これは戦場の教訓から創設されたのだと推定できる．看護人は戦場で働き平和時に，精神病院や感染症病院に勤務した．精神科病院には男手が必要なため互いのニーズがうまく合った．看護人第一期生清水耕一は何度も戦争に行き，松沢病院に 47 年間勤めた．清水は 1908 年に看護人用の教科書『新撰看護学』を出版した．松沢病院が新築され，1919 年 11 月には巣鴨から松沢病院へ患者ごとの移転をしたがトラブルは無かった．軍隊の行軍と怪我人輸送のノウハウがこの時に生きた．震災当日松沢病院の建物も倒壊したが清水看護長は，職員に帰宅を禁じた．病棟ごとに職員と患者の班構成の小グループを作った．これは現在でも病院内でも受け持ち患者制として実行．清水が卓抜なのは建物内が崩壊して危ないので松林の中をロープであたかも病棟，病室のように区切ったことだ．兵団の野営の様に 1 週間暮らし何のトラブルもなかった．それまでの清水の従軍経験が生かされた．看護人は看護婦が戦場に行くようになると，自然消滅した．①災害時の現場ではスタッフの的確な判断が重要．②精神病院法は災害時の再建などの運営面で大きな役割をしていた．③戦争が終結すると精神科病院で看護人が働くというシステムが存在した．

（日職災医誌，64：342―348，2016）

―キーワード―
関東大震災，都立松沢病院，精神病院法

## Ⅰ　初 め に

日本全国に入院 300 床規模の精神科病院は，多数ある．精神科病院は伝染病，災害に弱く，たびたび火災，地震などの被害にあったが，その分析，研究はない．最近でも 2013 年 4 月 26 日にロシアのモスクワ郊外ラメンスキー精神科病院で火災（図 1）があり，2013 年 9 月に，ノヴゴロド州ルカ村の精神科病院オクソチで，火事がありロシア国内で問題になった．驚いたことに二つとも木造二階建てで，火のまわりが早かった．だがこれは明治，大正のわが国の精神科病院が抱える問題でもあった．入院患者が原因であることも多く，精神科病院では身体検査は欠かせない．また妄想，拒絶症状があり，火事でも逃げようとしない患者さえいる．

2015 年 10 月 4 日関東労災病院の院内研究の一環として東京で最古の民間精神科病院，根岸病院の移転前の場所を関係者と確定，調査した．火災が 2 回あり，東京都台東区根岸から国立市に移転したことが分かった．元の場所は帝国大学から旧道でわずかな距離で，本郷のそばでないと明治初期，精神科医の少ない時代都合がつかなかったと考えられる．現代でもよくある大学病院との掛け持ちである．

現存する中では日本最古の公立精神科病院，都立松沢病院は 898 床，1919（大正 8）年 11 月 7 日開院だが，当時は東京府立（図 2）だった．関東大震災（図 3）は松沢病院建設の 4 年後，1923（大正 12）年 9 月 1 日に起こっ

図　1

図　3

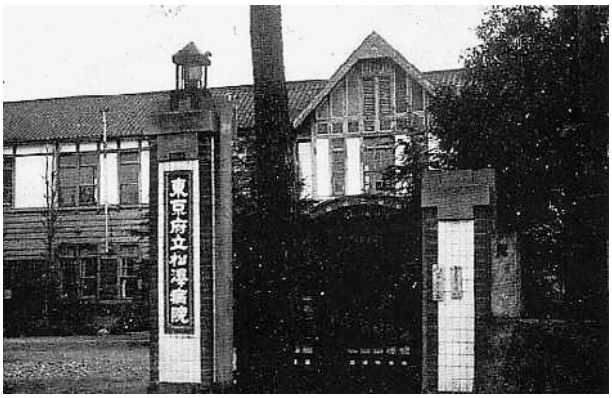



図　2

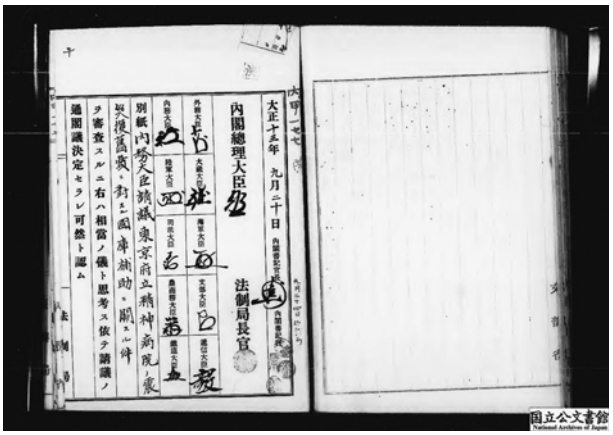



図　4

た．松沢の建物は大変な被害を受けたが人的被害は無く，速やかに復旧した．この経過を示すハードとソフト面の一次資料を数点発見した．この事例を中心に精神科病院と災害，また戦前の精神病院法が復旧にどのような役割を演じたかについて論じる．本論を始める前にいくつかの点を説明，確認しなければならない．

## II　精神病者監護法と精神病院法

現在でも一般病院は医療法，精神科病院は精神保健福祉法と監督する法律は異なる．例えば精神科病院には，精神障害者以外の人を入院させられない．戦前は更に精神科病院には，精神病者監護法と精神病院法の二つの法律が適用された．

精神病者監護法は日本で初の精神障害者に関する法律で，都道府県によって異なったが，私宅監置，通称座敷牢を主に管理した．私宅監置は医療が無い以外は，しっかりとした法律だった．「医療が無いとは建物の構造などに重きが置かれ警察官が巡視し，医師は最初の診断以外に往診の義務は無かった．」患者を家族が虐待していないかに，重点が置かれたためである．

その欠点を補い，障害者を必要に応じて精神科病院に入院させるために，精神病院法ができた．病院が少なくその後も私宅監置は併存した．陸軍海軍病院は多数建設されたが，当時の日本に精神科病院を作る余裕が十分には無かった．ただアジア全体で見ると，他とは比較にならない充実度だった．隔離拘束のみの視点で，精神病院法は役にたたなかったという評価があるが細かな分析はされなかった．

1924（大正 13）年 9 月 27 日勅令 229 号，精神病院法第 3 条の規定を根拠に国庫から関東大震災の松沢病院の復旧費 43 万 4,467 円 40 銭のうち約二分の一，20 万円が補助された．（図 4）第 3 条は精神科病院運営費用の半分までを補助するという規定だ．精神病院法は精神科病院建設ばかりでなく，非常時にも有効だったことは，今まで述べられていない．

松沢病院だけではない，1926（大正 15）年 4 月精神病院法第 1 条に基づき 300 床で開院した大阪府立中宮病院，現在の大阪府立精神医療センターが，1934 年の室戸台風で被害を受けた際にも同様に復旧費が補助された．（図 5）

関東大震災時では松沢病院が大きな被害を受けた話は聞かない．正確に言えば「大被害を受けたが混乱は無く，後世に語り継がれなかった」地震当時，陣頭指揮に立ち現場をおさめた責任者がいた．震災当日のことが，松沢

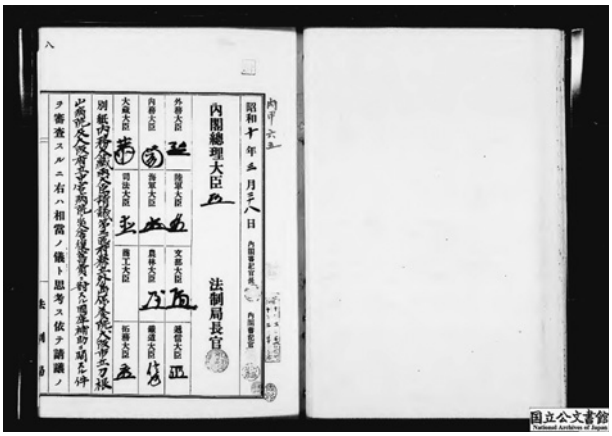



図　5

清　水　君　の　像

図　6

病院，作業療法の祖と言われる加藤普佐次朗[1]の『至誠の人清水耕一君』[2]という伝記本に詳細に載っている．それをもとに分析する．清水耕一（図 6）は看護人だった．

## III　看護師のルーツ

看護人について説明する．日本は昔から，日清，日露戦争まで戦場に女性看護者を連れていく発想が無かった．その時代を描いた映画やドラマに女性が出てこないのはその理由による．むろん籠城戦などで例外はあった．明治時代の文献を読むと，1888（明治 21）年（確認できる最古）近代軍隊に最初男性だけの「看病人」という資格を置いた．それ以前には「看護手」「看護夫」という言葉も出てくる．

1894 年 9 月 15 日，日清戦争で最高司令部大本営が広島に置かれた．当時看護婦は広島の陸軍病院までで，そこに病院船で送られてきた病人を看護婦が看護した．前

図　7

線から病院船までは看病人（その後看護人）の仕事で，そのため広島の陸軍病院が，大陸の負傷者の受け皿として拡大したが，原爆で消滅した．

『陸軍召募規則』[3]によると，1898（明治 31）年 10 月に「陸軍看病人磨工召集規則」が通達された．それに伴い「明治 21 年陸軍通達第 229 号陸軍看病人磨工召募準則」と「明治 22 年陸軍通達第 146 号屯田兵医員及び看病人磨工取り扱いを廃す」とある．少なくとも 1888 年には看病人という資格があったことが分かる．「磨工」とは原文を読むと「衛生材料獣医材料の研磨，修理」をする人とある．

看病人は採用より 6 カ月，勤務をしながら時間を定め看護学を修行するが「その後は勤務の間に必要な学術を教授する」とある．また看病人は部隊ごとに，必要人数を採用する．専門機関での教育は無く，公の資格ではない．身長五尺，151.5cm 以上で健康，テストは読書と作文（ふつう書簡文）のみを部隊内で行うとある．履歴書の見本もあるが士族，平民などの身分を書く欄もあった．

大阪真田山陸軍墓地は昔，真田幸村の大坂城の出丸跡の候補の一つにできた陸軍墓地である．西南戦争，日清，日露戦争から，太平洋戦争に至るまでの戦没将兵が葬られている．ドイツ人，中国人捕虜という古い墓まである．現地調査をした所，墓碑に看病人（図 7）と刻まれている物が多数ある．

専門機関の教育ではないので，戦場で使えなかったのだろう．そのため看護人という資格ができ，戦争の他に精神科病院と大きく結びついた．当時は「看護婦」と言った位で，一般病院内の看護は主に女性の仕事だった．看護人は別の資格で男性のみ，募集も別々だった．

1890 年に日本赤十字社で看護婦養成開始，1896 年から

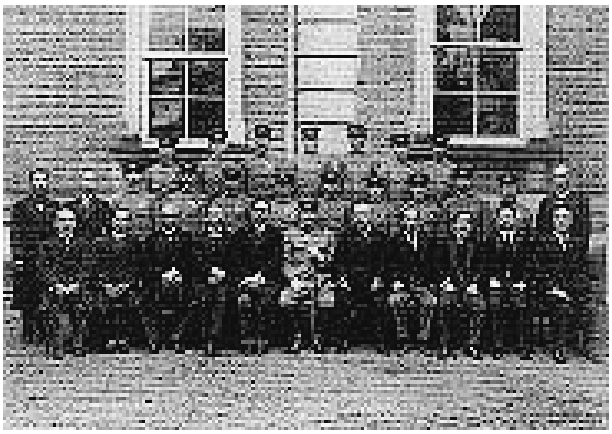


図 8

は男子看護人養成も始まった．1895 年に日清戦争が終わったので，これは戦場の教訓から創設されたのだと推定できる．

図 8 は日本赤十字大学に残る第一期生の卒業写真で，前列中央は軍人と思われるが，両側の平服が教官である．後列の軍服姿が学生で，この中に後述する清水もいたはずだが，人物は特定できない．日清，日露戦争で看護人は平和時に，精神病院や感染症病院に勤務した．それらの病院にはどうしても男手が必要なために，お互いのニーズがうまく合ったと考えられる．

1901（明治 34）年刊行の『兵士之友』[4]に「日本赤十字社看護人生徒募集要項」が載っている．内容を見ると右頁は「看護人」募集で，左頁は「看護婦」募集だ．看護婦は女性のみで，看護人は男性だけだ．看護人は 20 歳代で身体健康，学費不要で給料が支払われた．ただし父母の病気，急死以外は休学を許さず，卒業後は大陸に派遣するとある．

1904（明治 37）年 6 月『戦地職業案内』[5]という本には「看護人は看護長，看護手などの軍人兵員より成り」とあり軍人に準じた．多数が戦場で亡くなったのを示す資料がある．1905 年発行の『男女必適就業案内』[6]という本は日露戦争中発刊で「赤十字社臨時看護人見習い」を募集している．臨時募集要項によれば，条件は官公市立病院で 1 年以上看護人の職についた者，陸海軍看病人だったなど四条件が掲げられている．補充が必要だったのだろうが，条件を満たす人はすでに戦場に行っていたのだろう．「採用する志願者がなければ，勢い無経験の人を試験の上採用し」とある．

看護人の死亡率が高かったのは，倒れた兵士を弾の飛び交う中，後方へ運ぶ事が重要な任務だったからだ．後の太平洋戦争まで，戦地で兵士は勝手な後退は許されなかった．日露戦争では 203 高地，現在中国名は白玉山の陣地を奪う激戦があった．現地調査したが今は緑におおわれているが当時，草木は無かった．さえぎるものがない山肌で突撃を繰り返し機関銃で，たくさんの兵士と看護人が亡くなった．

1 カ月の実施練習で採用されると，見習い中でも月 15 円が支給された．同頁にある「巡査，看守」の給料は月 9 円からで部長になり始めて 15 円となる．看護人見習いは郷里から上京する際にも交通費支給，別に旅行手当が 1 日 1 円出た．さらに臨時看護人本採用で，給料は 20 円，戦地入りや病院船乗りこみでさらに手当がついた．看護人はいきなりの高給だったことが分かる．ちなみに別の頁にある「看護婦および産婆（現在の助産師）」は産婆講習所で，授業料が月 1 円，寄宿生は別に月 5 円かかるとある．

2016 年 4 月 28 日に 88 歳の元日本赤十字看護婦から，聞き取り調査ができた．戦後 2 回病院船で，ラバウルに傷病軍人を収容しに行った．ラバウルは米軍の飛び石作戦で，後方に取り残され，陸軍が直接戦火を交えることは無かった．船は客船を改造した氷川丸とのことで，記録と船名が一致する．戦後も磁気機雷に船団が触れる危険な仕事で，勤務手当の良さを何度も強調していた．

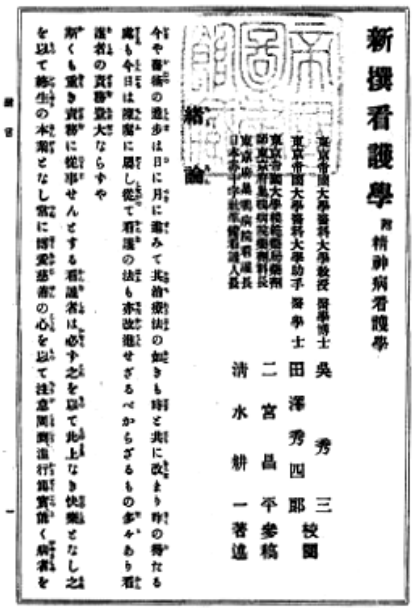
現在は均等に分ける両親の遺産は，1945 年まで長男が総取りだった．長男夫婦の権威は絶大で，次男以下は家を出て仕事を探すしかなかった．男は小金を持たないと結婚もできない当時の時代背景があった．高給を目的に看護人になる理由の一つがここにある．

## Ⅳ　清水耕一

『至誠の人清水耕一君』によると，1873 年 11 月 18 日福井県に生まれた．清水の家は福井藩士で百石取り大目付だったが没落した．17 歳で東京府巣鴨病院に入り，初めは臨時雇いだったが，夜学に通い筆記試験に合格して正職の看護人になった．1894（明治 27）年 7 月～1895（明治 28）年 3 月の日清戦争に従軍したが，この時は看護経験があったので看病人で採用されたと考えられる．

1896 年日本赤十字看護人学校に入ったと記録にあるので，第一期生である．1897 年卒業式で総代として答辞を読んだ．1898 年 11 月 11 日，巣鴨病院看護長山名鉄四郎氏の後任として，同院看護長となり月給 12 円となる．巣鴨病院は松沢病院の前身で，巣鴨駅より山の手線の内側，現在の日本医師会，東洋文庫ミュージアム，東京都立小石川中等教育学校などを含む広い地域である．実際に歩いてみたが，本郷から中仙道の一本道で近い．やはり医師掛け持ちの利便性から，この場所が選ばれたのだろう．

1900 年から 1901 年に義和団の乱[7]で赤十字社看護人組長として病院船に乗り込む．帰国後 1901 年 11 月 5 日開院した精神病院保養院[8]の看護長となる．1904（明治 37）年 2 月 8 日から 1905（明治 38）年 9 月 5 日の日露戦争に行き，帰国後は呉秀三院長の下で巣鴨病院看護長に復職した．巣鴨病院のそばに保養院があるので，呉秀三が清水を勧誘したと考えられる．呉は巣鴨病院の内部改


新撰看護學
附精神病看護學

東京帝國大學醫科大學教授　醫學博士　呉　秀三　校閲
東京帝國大學醫科大學助手　醫學士　田澤秀四郎
東京帝國大學醫科大學教授附屬病院藥劑科長　二宮昌平　參稿
東京府巣鴨病院看護長　日本赤十字社看護人長　清水耕一　著述

緒論

今や醫術の進歩は日に月に進みて其治療法の如きも昨日と共に改まり昨の尊たるべきも今日は陳腐に屬し從て看護の法も亦進歩せざるべからざるもの多かり看護者の責務益大ならずや
斯くも重き責務に從事せんとする看護者は必ず之を以て光上なる快樂となし之を以て終生の本願となし常に博愛慈善の心を以て注意周到遺漏なく病者を

図 9

革を考えていた.

1904 年 4 月 1 日，東京府巣鴨病院は東京府と大学とで協議し，それまでの医長，事務長制度を廃して，以前の様に再び院長制度として，呉は院長になった．職員の改革も行われた.

「1906 年 1 月 26 日，東京府巣鴨病院は看護人養成規則を定める．卒業者は看護婦免許を発行される」[9]

性格上看護人と看護婦の教育課程は異なる．清水は 1908 年に看護人用の教科書『新撰看護学』[10]（図 9）を出版した．清水の教科書の特徴は，序論に小さく「付精神病看護学」と書いてあることだ．看護婦教科書と異なるのは，内科が全く無く外科的処置の次に感染，衛生学で「精神病及び看護学」というコーナーが現れる．精神科は 289 から 349 頁，統合失調症の基礎から始まりまで詳しく書いてある．要するに一冊で戦地と平和時の精神病院勤務に，使えるようにしてある．併記してある二宮昌平は 1906 年に 29 歳で巣鴨病院の薬局長になり，海外の製薬会社に引き抜かれ MR 第 1 号と言われている.

清水は 1911～12 年辛亥（しんがい）革命[11]，1918 年ロシア革命時のシベリア出兵[12]にも参加した．帰国後，巣鴨病院に復職した．松沢病院が新築され，1919（大正 8）年 11 月には巣鴨から松沢病院へ患者ごとの移転があった．この患者移送を統括した．有名な患者葦原将軍[13]を先頭に，大変な行列だったがトラブルは無かった.

伝記によれば「苦心せられたのであるが，元来軍隊相手に経験を重ねられた君にとっては，移動は本職に属する事であったと思われる」加藤普佐次郎は，軍隊の行軍と怪我人輸送のノウハウがこの時に生きたと言っている．今なら車で簡単なことだが，人力車と徒歩での多数の患者の長距離移動など，精神科病院経験者が見ると想像を超えた困難さだ.

## V　関東大震災

震災当日松沢病院の建物も倒壊したが清水看護長は，次々に指令を出した．加藤はその本の中でこう評している.

「大正 12 年 9 月 1 日の勤務中に最初の震動がおそって来た．病院の一部は倒壊した．（略）それぞれ松林の中に駐屯させる，従業員の帰宅を禁ず（略）病院が全く建築物をなくして野営のままにその団体生活を続け，6 昼夜にわたって殆んど何等特別の故障もなく過した」

松沢病院は呉が当初村落療法などの患者の社会復帰を意図した．そのため京王線八幡山駅前に約 192,558 平方メートルという広さを誇る．軍隊の行軍過程などと照らし合わせ，再構成し分析してみる．まず従業員の帰宅を禁じたことだ．災害の時に実は病院は救助対象となり食料なども確保され，安全度が高いことが多い.

次に病棟ごとに職員と患者の班構成の小グループを作った．現在の病院内でも受け持ち患者制として実行されている．清水が卓抜なのは建物内が崩壊して危ないので，皆を外に出したが松林の中をロープで，あたかも病棟，病室のように区切ったことである．精神科の慢性期の患者は自我の障害によって従順，無為，自閉的な人が多い.

落ち着きのない患者には，職員数を手厚くしただろう．また混乱するスタッフと患者に，病棟ごとの単位をわかりやすくロープで区切り，目に見える形で指し示し指揮したのは卓抜な発想だ．もちろん夜は軍隊で言えば夜警，病院で言えば夜勤も置き巡回させただろう．なにより的確な指示が次々に出て，病院全体はパニック状態にならず落ち着いた.

兵団の野営のごとく 1 週間暮らし何のトラブルもなかった．それまでの清水の従軍経験が生かされた場面だった．「松沢病院看護科の首長」，「日本赤十字社救護員筆頭」，「新撰看護学の著者」，「百有余の看護人の総司令格」と加藤普佐次郎は評した．四男一女の父だったが，妻に 2 度も先立たれ 47 年間看護人を務めたが，1935 年 2 月 2 日亡くなった．享年 63 歳．当時の松沢病院院長は弔辞で「松沢の至宝」と呼んだ.

1981 年 4 月 5 日（日曜），都立松沢病院大会議室で「清水耕一看護長を偲ぶ会」が行われた．看護人は戦争が総力戦となり，看護婦が戦場に行くようになると，自然消滅した.

利益相反：利益相反基準に該当無し

## 文　献

1）加藤普佐次郎：1887（明治 20）年 11 月 11 日～1968（昭和 43）年 9 月 15 日．東京府立松沢病院医員から戸山脳病院長．病院が火災で焼失したため昭和 3 年加藤医院開業，東京

のメンタルクリニックの草分け. 普佐次郎の死後, 息子の清光が後を継いだ.
2）加藤普佐次朗：至誠の人清水耕一君．初版（非売品）．東京，発行人加藤普佐次朗，1936.
3）小島棟吉編：陸軍看病人磨工招集規則，陸軍召募規則．初版．東京，武揚堂，1905,（ページ番号なし，数えると）pp31―34.
4）宮崎善一郎編：第 83 日本赤十字社看護人生徒募集要項，第 84 同看護婦生徒募集要項，兵士之友．初版．埼玉県，文会堂，1901, pp 106―108.
5）鈴木栄作編：(4)医員調剤士及び看護人，戦地職業案内．初版．東京，星岡書院，1904, pp 21―24.
6）斎藤嘶風：赤十字社看護人見習い, 男女必適就業案内. 初版．東京，永楽堂，1905, pp 30―37.
7）義和団の乱：1900 年秘密結社による排外運動を当時の独裁者, 西太后が支持して清が 6 月 21 日に欧米列国に宣戦布告したが，2 カ月も経たないうちに日本を含む欧米列強軍が首都北京及び紫禁城を制圧した.
8）保養院：現在の JR 巣鴨駅そば，中仙道巣鴨村の田畑や種畑に開院．江戸の野菜の種が土産に喜ばれた.
9）金川英雄：現代語訳：わが国における精神病に関する最近の施設．初版．東京，青弓社，2015.
10）清水耕一：新撰看護学．初版．東京，南江堂書店，1908.
11）辛亥革命：1911 年から 1912 年，中国で発生した民主主義革命．1911 年の干支，辛亥からこの名がある.
12）シベリア出兵：1918 年から 1922 年，日本，イギリス，米国，フランス，イタリアなどがシベリアに出兵した，ロシア革命に対する干渉戦争.
13）葦原将軍：本名，葦原金次郎，1852（嘉永 5）年～1937（昭和 12）年 2 月 2 日．誇大妄想があり，その発言が新聞に載った．巣鴨，松沢病院の名物患者.

**別刷請求先** 〒211-8510 神奈川県川崎市中原区木月住吉町 1―1
関東労災病院
金川 英雄

**Reprint request:**
Hideo Kanekawa
Director of Psychiatry, Director of Mental Health Center, Visiting Professor, Department of Psychiatry, Showa University, 1-1, Kizukisumiyoshicho, Nakahara-ku, Kawasaki, Kanagawa, 211-8510, Japan

# Great Kanto Earthquake (Kantō Daishinsai) and Tokyo Metropolitan Matsuzawa Hospital Specializing in Psychiatric and Medical Services

Hideo Kanekawa
Kanto Rosai Hospital
Department of Psychiatry, Showa University

In the past, psychiatric hospitals have been damaged by natural disasters, such as fires and earthquakes. Founded in 1919, Tokyo Metropolitan Matsuzawa Hospital, with 898 beds, is the oldest public psychiatric hospital in Japan. The Great Kanto Earthquake occurred in 1923, 4 years after the hospital was built. Although the hospital recovered, "Mental Hospital Law" and "Damage and Recovery of Psychiatric Hospitals" were discussed based on the primary sources regarding the recovery process of this hospital.

Before the Second World War, psychiatric hospitals were under the control of two laws (Mental Hospital Law and Mental Patients' Custody Act.) In 1924, Tokyo Metropolitan Matsuzawa Hospital received 200,000 yen as financial assistance corresponding to half the recovery cost of damage due to the Great Kanto Earthquake, in accordance with Mental Hospital Law, Article 3. There are some other cases like this. "*Kanbyounin*," licensed medical staff similar to nurses but specifically for the armed forces and consisting only of males, were first introduced in 1888. The Japanese Red Cross Society began training female nurses in 1890 and male nurses, referred to as "*kangonin*," in 1896. As this was 1 year after the end of the Sino-Japanese War, this action was likely taken due to experiences on the battlefield.

These male nurses worked on battlefields in wartime, but they worked in hospitals specializing in psychiatric or infectious diseases during peacetime. It is especially important to have male workers in psychiatric hospitals, so the system fulfilled both needs. The first-generation male nurse, Kouichi Shimizu, went to war many times and worked for Matsuzawa hospital for 47 years. In 1908, he published a guidebook for male nurses called "*Shinnsen Kangogaku*" ("Newly Established Science of Nursing").

A new Matsuzawa hospital building was constructed, and in November 1919, each patient in Sugamo was transferred to the new location. The success of the move was because the ex-armed forces nurses were used to transferring injured people. The Matsuzawa hospital building that had been built in 1919 was destroyed in the Great Kanto Earthquake. However, Kouichi Shimizu (chief nurse) did not allow the workers to return home. Each hospital ward formed groups involving both workers and patients, a system that is also adopted in modern hospitals. Shimizu made good use of his military experience and used rope to divide the area into sections, which were run like hospital wards and cells, to protect patients and staff from danger in the damaged buildings. The situation in the hospital was very similar to that in a military camp, but they survived in this way for a week without problems. Once female nurses started going to war, the job of male nurses gradually disappeared.

We summarized three important points as follows:

(1) It is important that hospital staff should be capable of making precise decisions in the event of a disaster.

(2) Mental Hospital Law played an important role in rebuilding work in the wake of a disaster.

(3) There was a system in place for male nurses, referred to as "*kangonin*," to work in psychiatric hospitals after the war.

(JJOMT, 64: 342—348, 2016)

**—Key words—**

great kanto earthquake, Tokyo Metropolitan Matsuzawa Hospital, mental hospital act

©Japanese society of occupational medicine and traumatology http://www.jsomt.jp